

明治期のアンデルセンについて

石川 春江

はじめに

- I 明治期にアンデルセンはどれだけ知られていたか
- (1) 英語のリーダーにのった「マッチ売りの娘」
 - (2) 外国の児童文学にもあかるい巖谷小波
 - (3) 人名辞典類にのったアンデルセンの紹介
 - (4) 明治30年代の初期に入っていた、英訳のアンデルセンの代表作
 - (5) 日本ではじめてアンデルセンについてかかれたものは、彼の同性愛についてであった

- II 明治期のアンデルセン翻訳目録
おわりに

はじめに

明治20年以前に翻訳された青少年の読物の中で、大きな位置をしめていたのは『ガリバー旅行記』『ロビンソン・クルーソー』『アラビアン・ナイト』やジュール・ベルヌの科学小説などであった。しかしこれは内容からいって児童のためのものではなく、青少年にも幅広く読まれていたにすぎない。外国の児童文学が子ども向きの本として紹介されたのは明治20年以後で、この中で最もはやく訳されたのは、アンデルセン、グリム、ハウフなどである。こ

れは日本の児童文学の第一歩といわれる巖谷小波の『こがね丸』(明治24年)以前で、日本の新しい児童文学の動きはこの頃からはじめていたといえよう。

ところがこの胎動期に外国の児童文学が、どのようにして日本に入って来たのか、どのように日本という新しい土地に根をおろし、葉を茂らせていったのか、その詳細は意外なほどわからないのである。それは一つには児童書が元来消耗品であって後に残らないこと、そのために研究が非常にたちおくれられていることもある。今でこそ何種かの児童文学辞典も出版され、また文学史も児童文学の項目をいれるようになったが、それでもこの方面に力をそそいだ明治の人達の業績は、まだ霧の中にとざされているものが多い。そうしたはっきりしない、資料もほとんどないものの中から、外国のどのような種子が日本に入って来たのか、それを受けとる社会的な土壌はどうであったのか、受けとり方に片よりのあるならば、それにはどのような日本的思惟が根にあるのか、そうした関連の上で日本の児童文学の性格や流れについて、さらに日本の児童文化の歴史や問題について、考えてみたいと思ってきた。

アンデルセンの翻訳史はその一つの手がかりである。幸い国立国会図書館には、現在のところ日本でただ一つといわれる『王様の新衣裳』をはじめ、数多くのアンデルセンの翻訳本が所蔵されている。この稿ではこの翻訳について解題を付して年号順に紹介した。また明治期に日本に入ったアンデルセンの作品は、原語によるものはほとんどなく、英訳、独訳、仏訳などであったが、アンデルセンの作品が翻訳される基盤として、これら外国語による彼の作品が、いつ頃から人々に知られるようになったのか、また人名辞典などにアンデルセンが紹介されたのはいつなのか、などを当館の資料を中心に、現在わかった範囲で記してみたいと思う。

I 明治期にアンデルセンはどれだけ知られていたか

(1) 英語のリーダーにのった『マッチ売りの娘』

アンデルセンは1805年に生まれ、1875年に死んだ。日本でいえば文化2年生まれ、明治8年の死である。日本での翻訳は、今のところ明治21年3月の『女学雑誌』にのった「不思議の新衣裳」が最も古いと思われるから、アンデルセンの死後13年、デンマークではじめて童話が出版された1835年から約50年の年月がたっている。山室静氏は、アンデルセンの作品は彼の晩年、インドや中国でかなり紹介されていた

らしいから、日本でももう少し早い紹介があってもよいのではないかと、いっておられる(注1)。日本で文学関係の洋書が一般の人の手にわたるようになったのはいつ頃からなのか、その方面の知識のない私にはわからないが、丸善をはじめた早矢仕有的が明治14年に洋書の古本をあつかう中西屋を開店させたことを考えれば、当時相当の洋書が動いていたと考えられる。アンデルセンの作品も、明治20年以前に何らかの形で日本に入っていたであろう。

その一つの例として、New National Third Reader にマッチ売りの娘の話が The Little Match-girl の題でなっていることを、木村毅氏から教えていただいた(注2)。これは帝国図書館に明治19年5月26日文部省交付で受け入れられている。このリーダーには作者の名は書いていないが、こうした形で作品がいくつか紹介されていたことは充分考えられる。

(2) 外国の児童文学にもあかるい巖谷小波

明治20年代の前半には、アンデルセンの名は文学者の間では相当知られていたらしい。巖谷小波は日本ではじめての創作童話と一般にいわれる『こがね丸』を明治24年に発表した。この本の巻頭の凡例で「作者此の『こがね丸』を編むに当りて、彼のゲーターの Reineke Fuchs (狐の裁判) 其他グリム、アンデルゼン等の Maerchen (奇

異談) また我邦には桃太郎かちかち山を初めとし、古きは今昔物語、宇治拾遺などより天明ぶりの黄表紙類など種々思ひ出して立案の助けとなせしが、されば引用書として名記する程にもあらず」とかいている。『こがね丸』が出版されるや賛否両論さまざま論争がおこるが、『こがね丸』の文体の古めかしさに対する、堀紫山の論評の中にも小波のこの言葉はとりあげられ、「アンデルセンのメルヘン」はすでにこの頃人々には親しいものとしてとりあつかわれている。小波は幼い時から医者になることを父にすすめられ、ドイツ語を学んでいた。小波の『小波身上断』(明治40年)にも、10歳の頃ドイツに留学中の兄からオットーのメルヘン集を送られ、それが後々までの愛読書になったことを記している。アンデルゼンの作品を読んでいたことは『小波日記(己丑日録)』明治22年1月26日に「南江堂にてアンデルゼン求ム」とあり、同年2月15日に「二宮にアンデルゼンの小説貸し又氏より帽子借る」とあることから明らかである。ただし童話でなく小説であろう。なお明治23年11月16日にも「三好丑郎氏よりアンデルゼン借る」とあり、これもどのような本か不明だが、文学者の間ではアンデルゼンという作家が次第に知られていったことが推察される。ただ不思議なのは、明治24年の『こがね丸』の巻頭に「アンデルゼンのメルヘン」と書いた小波が、明治25年にはじめて

訳したものが『極楽園』であることである。これは山室静氏がいわれるように(注3)、アンデルセンの童話の代表作でもなく、日本人にとって難解な話であることである。小波は翌26年『幼年雑誌』に「かがり針」「飛行靴」の翻案をのせてはいるが、やはりこの時代は童話作家アンデルセンの名は知られていても、彼の童話の全貌、少くとも代表作は知られていなかったと思われる。

(3) 人名辞典類にのったアンデルセンの紹介

アンデルセンについて、当時どれだけの知識が得られるか、一つの手がかりとして人名辞典類をしらべてみた。洋書では、リップニコットの人名辞典1870年版(注4)が、明治10年に教育博物館(注5)に入っているが、これには相当詳細な紹介がのっている。また Beeton の人名辞典(注6)は明治8年東京図書館(注7)購入となっているが、これにも簡単ではあるが青少年向けの物語で名をなした作家とある。日本で人名辞典にのった最初のは、山田武太郎編『万国人名辞書 上巻 西洋及漢土之部』(博文館 明治26<請求記号23—215>)であろう。山田武太郎は山田美妙で、ここには「あぬだるせぬ」として彼の略歴を紹介しているが、「近代の有名な文学者」とあって童話作家であるとは書いてない。この人名辞書は、リップニコットを参

照しているらしく、リップンコットに1835年の作品「O・T」を「O・Z」としているのを、あやまりのまま紹介している。ただしリップンコットではそのあとアンデルセンの童話作家としての才能に言及しているのに、山田美妙は後半を省略してしまったのか、またはちがう本を参照したのか、その点をはっきりしない。

山田美妙の『万国人名辞書』の一年前に、芳賀矢一『世界文学者年表』(富士山房 明治25 <42—126>)がある。これはアンデルセンの名と生没年があるだけのものである。取材については「この書の編纂に関して和・漢・洋を併せて200部の上をいづ」とあって、何から取ったかはわからない。明治25年といえば芳賀矢一は東京帝国大学国文学科を卒業して大学院に入った年であり、この本の明治37年の再版には「大学在学中に起稿せしもの」とある。

(4) 明治30年代の初期に入っていた英訳のアンデルセンの代表作

明治20年代はアンデルセンの名は知られていても、彼の童話についてはまだ理解されず、30年代もほぼ同様、彼の代表作が翻訳されるのは明治40年代に入ってからである。ところが、帝国図書館の本の中に興味ある例を見つけた。Hans C. Andersen's Twelve Fairy Tales., Kobunsha, 1899 (The Kobunsha Series of Supplementary English Readers, for Middls Schools No. 11) <113—175>

興文社で編集した英語のリーダーであるが、この12篇は次のものである。「みにくいあひるの子」「仲よし」「高跳び競争」「雛菊」「野の白鳥」「蕎麦」「旅の道づれ」「豚飼ひ」「お父さんのする事はいつもよし」「王様の新しい着物」「幸運のオーバーシューズ」「ある母親の物語」。明治32年刊だがこの選択は非常にすぐれたものである。この本はすでに選ばれたものをそのまま使用したかもしれないが、当館には他に、1900年のロンドン発行のFairy Talesの大型本2冊があり、これには代表的な作品42話がおさめられ、Hans Tegner という画家の挿画が入っている(注8)。「帝国図書館 明治33年」購入印があるから、先の興文社刊のものもこうした本を参考にしたとも思える。とすると明治40年代になって代表作が訳されはじめるのは少々おそすぎる感がある。

(5) 日本ではじめてアンデルセンについてかかれたものは、彼の同性愛についてであった

辞典類でなくアンデルセンについて、日本でかかれた最初のもは、明治36年3月雑誌『明星』に巖谷小波がのせた「アンダーセンの半面」という演説記録であろう。これは小波が明治33年ドイツのベルリン大学附属東洋語学校の講師としてまねかれ、明治35年11月帰国後に講演したもので、内容はアンデルセンの同性愛の性癖についてである。これはベルリンの同性交際研

究会に小波がよばれて日本の話をさせられた際、その会の年報を見たところアンデルセンのことが出ていたとして小波が話したものである。アンデルセンが子どもの時人形をもてあそび、人形の着物を作るのが好きであったこと、彼は終生身をかざるのが好きであり、ついに結婚もせず、男らしい美男との交際を好んだといった内容の話で「私はアンダーセンの作物は好きであるが伝記を見て愛想がつきてしまった」と語っている。この話は次いで出版された『洋行土産』（2冊 博文館明治36年5月<96-210>）の最後にも再録されている。アンデルセンについての最初の紹介がまず同性愛では、アンデルセンに気の毒ではあるが、略伝が同じく巖谷小波によって明治38年9月『中学世界』第8巻12号に紹介され、これが日本で紹介された彼の伝記のはじめではないかと思われる。明治40年以後になれば彼の作家としての業績も人となりも相当に知られていたことは、翻訳本のあとがきなどによって知られるが、まとまったものは、大正に入ってアンデルセン研究の上で大きな足跡を残した芦谷芦村の研究まで、めぼしいものはないと思われる。

注

- 1 『明治のアンデルセン 山室静氏の講演と翻訳目録』児童書の会 1971
- 2 New National Third Reader, A. S. Barnes & Company, New York

and Chicago, 1884<36—161>

- 3 注1と同じ
- 4 Lippincott's Universal pronouncing dictionary of biography and mythology. Phila. 1870. <10—1>
- 5 明治10年創設された「教育博物館」は明治14年「東京教育博物館」と改称され明治18年6月東京図書館と合併、資料は後の帝国図書館にひきつがれる。
- 6 Beeton's Dictionary of Universal Biography. London. <65—36>
- 7 東京図書館は明治30年帝国図書館の創設により資料をひきつがれる。
- 8 Andersen, Hans. Christian, Fairy Tales, Newly tr. by H. L. Braekstad. Lond. 1900. 2 vols. <73—148>

II 明治期のアンデルセン翻訳目録

目録は刊年順とし書名、訳者、訳者生没年(ただし重複の場合は省略)、挿絵画家、画家生没年(重複の場合は省略)、出版社または掲載雑誌および巻号、最後に国立国会図書館の請求記号をいれた。解題の中の作品原題は岩波文庫の『アンデルセン童話集』大畑末吉訳による。

1. 明治21. 3 不思議あたらしきせうの新しい衣裳 女学雑誌100, 101号(小供のはなし第5, 6回) <雑54—4>
「皇帝の新しい着物」の訳。裸の王様の題でしられた話で、アンデルセンの作品の訳として現在最も年代の古いものと思われる。原作者アンデルセンの名も訳者の名も記していないが、『女学雑誌』95号(明治21年2月4日)に「小供のはなし」欄をもうけるについ

て、孩提がいていの翁おきなの筆名でその趣旨がのっている、これが訳者であろう。それによると「猿蟹合戦、かちかち山等子ども向の話はあるが数は少ない。子どもの心によくかない、しかも智徳の發育に効ある話のあれかしと平常思っていたが適当なものが我国にはない。西洋には『ミス・アルコット』の如き子ども向の小説を作る者もあり、又『セント・ニコラス誌』のような雑誌もあるが、我国にはこの辺の教育に深く注意する者のないのは残念である。吾々は今母親がその子に語るによい話をあつめてみたい。その話はただ筋書をかいて別に文飾せずこれを面白くもおかしくもするのは母親自身にまかせる」といった意味のことをのべている。オルコットやアメリカの有名な児童雑誌「セント・ニコラス誌」を当時例にひくこの孩提の翁は、この方面については相当の知識をもっていた人なのであろう。福田清人氏はこの孩提の翁を『女学雑誌』の主幹の巖本善治その人であろうとっておられる。氏のしらべによれば、巖本善治は『少年世界』にも児童読物についてしばしば執筆しており、「翁孫」「石翁」の雅号を用いておられるので、善治自身と推定されたといわれる。この雅号からの推定については、私には判断はつきかねるが、ただ「小供のはなし」欄の趣旨を見ると、この雑誌の編集の責任ある位置の人であることは充分うかがわれる。文章は口語と文語がிரまじって

はいるが、リズムのある力のこもった文章である。ただ「ある国の天子さまは」と書き出した文章が、次の回へゆくと「哀れむべし天皇はメリヤスの儘にて馬に跨がり朕にこそ不思議の新衣裳は見へざれ……」となり、ある国の天子さまにしても、この頃はまだこのような文章が別に問題にもならず書かれたのかとそれも珍らしく、また話の結末が原文とちがって「七八歳の童子も同じく拝覧してありしが、最いと頑かんはななく笑ひ出し見よ見よ天子さまは下着のままでお出でなりと叫びたるに今まで堪へ居たる見物ども一同にドット声をあげて叫びたるが、こは尚ほ新衣裳の立派なることをほめたるにて候ひしとなり」とあるのも注目される。この結末のまがいは訳者が記憶でかいたものなのであろうか、重訳にしてもこうした本すじのあやまりはしないとされる。さらにこの文章は「お前方は何でも正直にしそして正直な事を言ふには少しも恐るゝことなくキッパリと之を言ひ又断じて行はなければなりませんよ。」と教訓でむすんでいる。「小供のはなし」が元来子どもの教育を目的としてあまれ、外国作品を「訳す」という意識はあまりなかったと見るべきであろう。

2. 明治21. 12 飄世飄世奇談奇談王様の新衣裳 アンデルセン原作 在一居士(河野政喜)訳 春祥堂 28P

<特52—706>

昭和31年上野図書館の未整理本の中から発見されたこの本は、石川巖氏の『明治初期戯作年表』（昭和2）にはのっているが、ほとんどの人が見た事なかった稀本で、単行本としては最も古い訳と思われる。日本では国会図書館のみ、今一本デンマークのアンデルセン博物館にあると聞いて、どのような経路でデンマークに渡ったのかと疑問に思っていたところ、山梨県八代郡市川大門町の渡辺青州氏の「青州文庫」にあった『王様の新衣裳』を青州氏の息子さんの渡辺陸三氏がアンデルセン博物館に寄贈された由、山崎武雄氏に教えていただいた。「青州文庫」の本は今東大図書館にある。

この本は表紙の上部に仏語の標題がついており、訳者はあとがきで「右はデンマルク人アンデルセンの奇談集の一話なるが、未だ原書を見ざるによりて、姑らく仏蘭士人ソルデ氏の訳本より翻訳したり」と仏訳からの重訳であることを明らかにしている。なおあとがきは続いて「アンデルセンは貧賤より起り、百折千磨の辛酸を経て、終に小説の大家となるに至れる者なり、故に其小説は善く人情の微をきはめ得て、何人の心にも徹りやすし、此の話の如きは毫も意を用ひざるが如くにして、巧に世相を穿ち得たる者にして、之を浅く考ふれば極めて面白く、之を深く考ふれば極めて警戒となる。然れども斯のごとき寓意話は読む人の判断に任せて、別に説明を付けざるを却て

^{あじはひ}妙味ありとすれば、其指す所の何事なるかは今此に述べず、請ふ読者みづから之を辨まへよ」とあって、作者を童話作家であるとは思わず、諷世奇談とサブタイトルをつけたように、その風刺をするどく受け取っている。これは先の『女学雑誌』の訳が子どもに対する正直の教訓にしてしまったのとは、受けとり方に大きなちがひがある。

『王様の新衣裳』の本文は口語訳、今読んでも古めかしさを感じないなだらかな訳文で完訳に近い。この訳者は明治21年の末にラウリンソン著『旧約史論』<HP16—9>、ペレグリン著『男子女子論』<19—75>とつづけて3冊の訳本を出しているが、この在一居士河野政喜がどういう人であるのか今までのところ見当がつかなかった。ところがこの河野政喜という名が何人かのペンネームであるらしいことを滑川道夫氏よりうかがった。滑川氏の発表により今までわからなかったこの人物が明らかになる事が待ちのぞまれる。

なおこの本の翻刻は『明治文化資料叢書 第9巻』（翻訳文学編 風間書房 昭和34）『アンデルセン研究』（日本児童文学学会編 小峰書店 昭和44）に掲載されている。

3. 明治22. 10 王宮 小金井きみ子 (1870—1956) 訳 国のもとゝ 2巻7号（早稲田大学図書館所蔵）（かげ草 春陽堂 明治30. 5に

も収録<74—162>)

小金井きみ子の「絵のない絵本」の第5夜の訳は、兄森鷗外との共著『かげ草』の中に入っているが、それより早く明治22年10月『国のもとゐ』という雑誌の中に収録されていることが翻訳文学関係の目録に出ている。この『国のもとゐ』がどのような雑誌であり、どこに所蔵されているか、さがしたところ早稲田大学図書館にあることがわかった。『国のもとゐ』は東京高等女学校(東京女高師附属高等女学校)の教員たちが明治22年4月に発刊、当校の矢田部良吉校長による「良妻良母を教育する」同校の教育主義で編集された雑誌である。小金井きみ子は明治21年に同校を卒業しているので、卒業生として寄稿したものであろう。森鷗外は明治17年ドイツに留学、21年9月に帰国した時、アンデルセンのドイツ語訳を何点か持ち帰った。今鷗外の蔵書は東大図書館に所蔵されているが、その中に『絵のない絵本』のドイツ語版もあるので、この訳はそれを底本にしたと思われる。「月のみづから物語りし…」といった美文調の文語体で、後の『かげ草』の文章にはやや推敲のあとがみられる。絵のない絵本は全部で33話、この中でフランス革命の一挿話がなぜとられたか、山室静氏も疑問を出しておられるが(注1)『国のもとゐ』といった良妻良母主義とはいえ、パイオニア的な意気込みではじめられた雑誌にのせるために、社会的な問題

をふくんだ作品を紹介したのであろうか。

4. 明治24. 3 ^{ににん}二人むく助 紅葉山人(尾崎紅葉)(1867—1903)著
武内桂舟(1861—1943)画 博文館 114P (少年文学叢書第2篇)

<特47—601>

博文館より明治24年に出版された『少年文学叢書』の第1編は、小波の「こがね丸」第2編が尾崎紅葉の「二人むく助」である。これは「小クラウスと大クラウス」の文語による翻案で、武内桂舟のさし絵もちょんまげ姿のむく助が活動するまったく日本風の話になっている。そのためか東北地方の民話をあつめた佐々木喜善の『聴耳草子』にこの話がのっていると、山室静氏の話にあった(注2)。ところで原話では、貧しい小クラウスがただ一頭の自分の馬を大クラウスに殺されてからは、富んだ大クラウスをことごとくだまして金をまきあげ、最後は大クラウスがはかられて自ら水の中へ沈められてしまっても、何かからりとしたユーモアがただよっているのに、同じすじのはこびでも日本の話となると陰惨な暗さを感じさせる。それは紅葉が話の終りに「善人なりとも愚鈍^{うつけ}は亡び、悪人ながら智者は榮ゆる世の中の例。合点が参らば御学び候へ、どなたもどなたも」と書いている、そうした受けとめ方によるのかもしれない。当然当時の事としてこの作品は悪評をこうむったという。さし絵の武内桂舟は硯友社

の同人、博文館の『太陽』『文芸倶楽部』『少年世界』のさし絵主任であった。

5. 明治25. 3～5 極楽園 大江小波(巖谷小波) (1870—1933) 訳 小林清規 (1847—1915) 画 幼年雑誌 第2巻5～10号 <雑52—48> 「エデンの園」の訳。この訳は、小波の最初の言文一致による作といわれるが、かなり改作されている。訳の最後に「本篇、アデルセンの原著と相違の点少なからず、就中此大尾の如きは全く訳者の自作に出てたり、読者乞ふ之を諒せよ」とあって、原作の最後はパラダイスの仙女が、「私が『ついていらっしやい!』とさそってもついて来てはいけない、眠っている私に接吻してはいけない」と王子に約束させるが、王子はさそいに応じて仙女についてゆき、接吻すると、今までのパラダイスの園はくずれ真暗な闇の中に王子は落ちる、となっている。ところが小波はここを子ども向きに、酒に酔って王子が目をさまし、のどのかわきでアダムとイヴのりんごの実を食べて闇に落ちると改作している。わざわざ改作をことわったのは良心的だが、子ども向きでわかりやすい話なら他にいくらかあるのに、改作してまでこの話を選んだのは、先にもふれたように他の童話をしらなかつたのであろうか。さし絵は版画家として名高い小林清親。清親は当時子ども向きの本の挿画を多くかいている。(なお、「極楽園」は『新

御伽草子』(博文館 明治25. 11 <特10—239>) にも掲載されている。)

6. 明治25. 11～34. 2 即興詩人 鷗外漁史(森鷗外) (1862—1922) 訳 文学評論 志がらみ草紙 38, 40, 41, 42, 47, 48, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 58, 59号 <雑8—6> 即興詩人 観潮楼主人 めざまし草 巻14, 15, 16, 18, 23, 24, 25, 26, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 48, 49 <雑8—17> 即興詩人 上・下 森林太郎 春陽堂 明治35. 9 <86—356>

明治期より今日まで、原作以上の名訳といわれた作品。この訳は当時の日本文壇のロマン主義運動に大きな影響をあたえた。「即興詩人」ははじめ鷗外主宰の『しがらみ草紙』に連載され同誌が鷗外の出征によって廃刊のち再び発行された同趣旨の雑誌『めざまし草』に連載され、完成におよそ9年の歳月をかけた。この訳の底本といわれるドイツ語本は現在東大附属図書館に所蔵されている。なお単行本となった即興詩人は、鷗外が母親に読んでもらうために4号活字で組ませたという。

7. 明治26. 1 ピン物語 漣山人(巖谷小波) 著 幼年雑誌 3巻2号 (流 幻燈会 其1) <雑52—48>
8. 明治26. 3 カバン旅行 漣山人

(巖谷小波) 著 幼年雑誌 3巻
7号 (流 幻燈会 其4)

<雑52-48>

「ピン物語」は「かざり針」の翻案。当時はやはりはじめた幻燈会とみたとて、はじめに口上、ついでピンのひとりごと「アゝつまらねえつまらねえ。吾位つまらねえ者はあるまい……」といった調子でひとりごとがつづくが、原作の身のほどしらずにお高くとまったピンの面白さがここではぐちに終ってしまっている。取材につかっていたもので、原作とは内容的にだいぶちがったものになっている。

「カバン旅行」は「飛行靴」から、空とぶカバンというヒントだけ取って、当時シベリヤ遠征で名高かった福島中佐のいるシベリヤにカバンに乗って飛んでゆき、馬をはしらせる福島中佐に追いつこうと杖でカバンをうち、ついにカバンがやぶれて下におちたところで眼がさめた、という趣向である。これも原作とは内容は似ても似つかないものになっており、小波がアンデルセンの童話を読んだことはあとづけられるが、内容的には何を読み取っていたのかと疑いたくなるような作品である。

9. 明治26. 9 極楽郷・雪の女王
不知庵(内田魯庵)(1868-1929)
訳 警醒社(『鳥留好語』の内)
<44-57>

『鳥留好語』は魯庵の生前から稀本といわれていた本で、柳田泉著『明治

の書物・明治の人』によれば「ちよりゆうこうご」とよみ、きれいな鳥が歌いとどめた好い物語の意で、尾崎紅葉の命名という。アンデルセンの訳と共にポー、ディケンズ、エッチワース、ブレット・ハートが紹介されている。

内田魯庵は内外の書に広く親しんだ人であるが、「エデンの園」がここで再び訳されているのは、この作が何かによって早く日本に紹介されたのであろうか。「雪の女王」はアンデルセン童話集の中では長い話であるが、要をえた文語体でほとんど完訳である。

10. 明治27. 1 スミルナの花 禿木
(平田禿木)(1873-1943) 訳 文学界 第13号 <雑8-16> (御墓
の花 雪丸 少年世界 第5巻13号
明治32. 6 <雑52-10>)

「ホメロスの墓の薔薇一輪」の訳。前書に馳馬の詩人アンデルセンの作を友人が英文に訳してくれたものをさらに訳したとある。禿木はこの訳の出た明治27年第一高等中学校を退学、翌28年東京高等師範学校英語専修科に入学する。学業途中ではあるが後の英文学者禿木を思わせるきわめて美しい文語訳である。この作品は「御墓の花」として『少年世界』5巻13号にも掲載されている。

11. 明治28. 10 新竹取物語(一名指子姫) みやつこまる(森晋太郎)
著 武内桂舟画 少年世界 第1巻19, 21, 22号 <雑52-10>

「おやゆび姫」を日本風に翻案した作品。筆者みやつこまろは『少年世界』1巻13号の総目録に森晋太郎とある。この人は、嶺峯と号し、他にイブセンの『社会之敵』（明治34年）の訳のあることを西田長寿氏に教えていただいた。時事新報の記者で英語のよくできる人であったという。

この訳は「新竹取物語」と名づけられ、武内桂舟の着物を着たおやゆび姫の絵とともにきわめて日本風な物語になっている。例えば冬になっておやゆび姫がねずみのおばさんに救われ、隣にすむ金持のもぐらのお嫁さんになるようにすすめられるところに「隣家のむぐら、愈よ御身を宿の妻に迎へ度しとなり。女は氏なりして玉の輿に乗るとかや……」とある。

12. 明治29. 6 新衣皇帝 紫楼 少国民 第8年12号 <雑52-1>

訳者紫楼については不明（東海散史・柴四郎であろうか）。「皇帝の新しい着物」いわゆる「裸の王様」の風刺のきいた話の面白さは、当時の人々の注意をひいたらしく訳が非常に多い。この話はアンデルセンが1837年版の童話集の自序で「この着想はドン・ファン・マヌエル公に負うものである」と書いているように、スペインのアルフォンソ十世の甥であるマヌエル（1277—1349?）の教訓的な寓話集『ルカノー伯爵とパトローニオ例話の書』の第32話にあるという。戦争と陰謀にあげ

くれたスペイン貴族の話らしくなかなか痛快な話である。

ところでこの訳も原文に忠実な訳ではなく、最後は「古より赤裸の御行幸は稀なりとて、いまにいひ伝ひぬ。御還幸の節の皇帝の御容貌、供奉の挙動、詐偽者の行方、これ等は誰も知る能はざりしといふ。」とむすんで、原作の裸の王様は困ったが、なお一層威厳をもって歩く、そして侍従たちはありもしない裳裾を捧げて進む、といった話の結末には、まだなじまないであろう。

13. 明治30. 3 花の復讐 太田玉茗 (1871—1927) 訳 文芸倶楽部 第3巻4編 <雑8-31>

「薔薇の妖精」の訳。恋人を殺された娘が、その恋人の首を植木鉢にうめその上にジャスミンを植える。一部始終を見ていた薔薇の花の精がジャスミンの花に語り、花の精が恋人を殺した兄を殺すという話でこのロマンにひかれて訳したものであろう。玉茗は当時国木田独歩、田山花袋、宮崎湖処子らとともに叙情詩派のひとりとして位置をしめていた。口語訳である。

14. 明治30. 5 月物語 太田玉茗 太陽 第3巻第9号 <雑54-35>

「流燈」「薔薇かざし」の2編、「絵のない絵本」の第1夜と第3夜の話を、前に掲げた「花の復讐」とちがって文語訳。書き出しは小金井きみ子と同じように「月の自ら物語りけるは」

となっている。

15. 明治35.5 マッチ売りの小娘 平尾不孤 金港堂(金港堂お伽噺)
(三康図書館所蔵)

16. 明治35. 11 教会堂の古鐘 名川鴻河訳 明星 第3巻6号

<雑8-28>

「古い教会の鐘」(シラー記念帳のために)の訳。訳者名川鴻河については不明。内容はアンデルセンの敬愛する彫刻家トルワルゼンによるシラーの像にふれてかいたもので、詩人としての彼のシラーに対する愛情に満ちたものである。童話集に入っているが、内容は童話ではない。口語訳。

17. 明治36. 3 花物語 星郊生(生田長江)(1882-1936)訳 明星
卯歳 第3号 <雑8-28>

「もの言わぬ本」の訳。評論、小説戯曲、翻訳と幅広い活動をした生田長江は、この訳を出した明治36年東大哲学科へ入り美学を専攻、翌37年上田敏、馬場孤蝶等の『花苑』の同人となり、上田敏の命名でそれまでの号星郊を長江と改めたといわれる。この話は死んだ不幸な詩人の持っていた本にはさまれた、花や葉のさまざまな思い出の物語である。

この『明星』の目次には、花物語の題の下に(美文)とある。(長詩)(短詩)(小説)(俳句)などと並んで(美文)というジャンルに、アンデルセンの訳が並ぶというのは、興味あることであ

る。アンデルセンの訳を年代を追って見てくると、アンデルセンが童話作家として受け入れられる以前に、ロマンチックな作風の作者として、『明星』『文学界』『文芸倶楽部』などに紹介されてきた理由がわかるような気がする。彼の散文的な短篇は、美文でまとめるには手ごろなものであったろう。平田禿木、太田玉茗、生田長江らは、こうしたアンデルセンの詩人としての要素をたくみに生かして翻訳したと思われる。

18. 明治36. 6 腹黒き童 柴田守中
訳 明星卯歳 第6号

<Z911.105-M-10>

「いたづらっ子」の文語訳。キュピットに心臓を射られた詩人の話で、これも童話というより、詩的なものである。

19. 明治36. 7 不思議の火絨箱^{ほくちばこ} 杵屋絲遊訳 中川葦舟画 少年世界
9巻9号 <雑52-10>

「火打箱」の口語訳。アンデルセン童話集の最初にある、民話から取材した話である。さし絵の中川葦舟は小波の『世界お伽噺』などにもさし絵をのせている。

20. 明治38. 4 花の舞 抱影 読売
新聞 23~30日

国会図書館に所蔵せず。

21. 明治39. 3 狂言衣大名 杉谷代水(1874~1915)著 早稲田文学
<雑8-40>

「皇帝の新しい着物」を狂言に翻案した作品。「主『隠れもない大名でゐる。此中は衣裳も数寄を致いて、唐倭ありとある程の衣は試みてゐれども、はや大方は飽き果ててゐる。さる間、何か世に珍らしい衣もあれば求めたいと存じ、高札を打たせてゐる」と、王様を大名に、さぎ師をスリにしたてたなかなかたくみな狂言である。杉谷代水は坪内逍遙門下、英文学、国文学にも明るく、新体詩、戯曲などの作品も残している。この作品は『杉谷代水選集』（富山房 昭和10）にも収録されている。

22. 明治40. 11 縦の木・思ひ同志
本間久四郎訳 文禄堂（名著新訳の内） <26—432>

「思ひ同志」は「仲よし」、こまとまりの話である。本間久四郎はあとがきの中で、アンデルセンの物語の特徴を「(1)必らず何事かの観念を有する事、(2)叙景を描くことに精緻巧妙なる事、(3)教訓を示すといへどもただ徒らに思考仁義を説くの類に非ず、読者の心の底より知らず知らず良心を喚び起さしめて、自から行を慎ましむるに至る事、(4)甚だしく詩趣に富める事」とそれぞれ作品の例をあげている。この本の中にはアンデルセンをはじめポー、コナン・ドイル、ホーソンなども紹介している。本間久四郎は夜香生、天馬楼主人、天馬桃太の名でかずかずの訳を出している。

山室氏も指摘されているように（注3）、代表作が翻訳されはじめるのは明治40年代に入ってからであり、これ以後はすべて口語訳になる。

23. 明治40. 12 魔法破 雨谷石燕訳
開文社 63P <特45—968>

「旅の道づれ」の口語の抄訳。内容は同じだが、犬にかみつかれてこわされる人形のお妃が、八重垣姫になっていたり、所々に日本風な改作がある。

24. 明治41. 2 赤靴物語 百島操訳
内外出版協会 100P（通俗文庫第4編） <特47—71>

「赤靴物語」「醜い家鴨」「マッチ売娘」「四季物語」「親ごゝろ」「くりすます樹」の6編の口語の抄訳である。「親ごゝろ」は「ある母親の物語」「くりすます樹」は「縦の木」の訳。百島操は冷泉と号し、グリム、トルストイ、ストウ夫人のアンクル・トムなども訳している。

25. 明治41. 11 火打箱 寺谷大波
（友吉）編 笹井英昭画 博文館
39P（世界お伽噺第4編）

<特47—670>

寺谷大波については不明だが、小波が博文館から『世界お伽噺』全100冊を明治31~40年にかけて出版した、その成功を見ての企画であろう。第1巻のはしがきに「博文館世界お伽噺発行に就て」とあって、「新井文明堂主人と久保田独立閣主人が自分のところに来て、小波の博文館、世界お伽噺も完結

したから、共同で『世界お伽噺』の体面を汚さないようなお伽噺集を発行したいと話した。自分は小波さんのような立派な方の真似などできぬから一応ことわったが、兩人のたつてのたのみでついに承知した。傳文館の名は書経の中にある語を思い出してつけたとの意味のことがかいてある。しかし名も小波に対して大波、出版社は傳文館、叢書名も同じで、まことにまざらわしい。この叢書は明治41年から大正にかけて出たものである。

26. 明治43. 10 教育お伽噺 和田垣謙三 (1860—1919) 星野久成共訳 小川尚栄堂 335P <98—276>

「教育お伽噺」と名づけてアンデルセンの物語を人生訓とうけとっている。1冊に52話をもりこんでいるので抄訳になり誤訳も多い。「小クラウスと大クラウス」が「二人空兵衛」、「雪の女王」のカイとゲルダが太郎と美ィちゃんなど日本風な改変がめだつ。また「絵のない絵本」を「月物語」と題して、そのうちの1夜から12夜までを挿入している。訳者の一人和田垣氏は明治14年イギリス留学後、法科大学講師となり、商業学校を経営して民間実業教育の振興につとめた。和田垣、星野共氏は同じ出版社から『家庭お伽噺』（グリム原作）も出している。

27. 明治44. 3 アンデルゼン物語 内山春風訳 春祥堂 光世館 292P <338—13>

「野鶉」「樅の木」「赤い靴」「小人魚」「鐘」「母の情」「水の滴り」「薔薇の精」「家鳴の子」「四季物語」「雛菊」の11篇を収める。「母の情」は「ある母親の物語」、「水の滴り」は「ドブの水」である。訳者は巻末のアンデルセンの紹介の中で、アンデルセンのお伽噺は子どもの読むべきお伽噺でなく、深い人生観と哲理があるとのべている。内山春風については詳細は不明であるが、口絵に肖像写真があり、また滑川道夫氏は『アンデルセン研究』（日本児童文学学会）の中で「日比谷図書館につとめていた」とかいて居られる。

28. 明治44. 4 アンダアゼンお伽噺 近藤敏三郎訳 精華堂書店 264P <338—18>

「皇帝のお召物」「雛菊」「不思議な靴」「燐寸売の小娘」など16編の抄訳。訳者は、はしがきでアンデルセンのお伽噺を「人生を指導する名著」ととらえ、一編ごとに教訓的な解説を加えている。なお訳者はこの他にグリムやロビン・フッドなどを訳しているが、そのいずれにも教訓的な解釈を与えている。

29. 明治44. 4 ^{アンデルセン}安得仙家庭物語 上 田万年 (1867—1937) 訳 橋口五葉 (1880—1921) 画 鐘美堂 610P <329—94>

漢字制限、国語音韻、ローマ字普及等に先駆的働きをした国語学者上田万年は、子どもの読物についても多くの

すぐれた業績を残した。この本は完訳に近く、「醜い家鴨の雛」をはじめ25篇のすぐれた訳がおさめられている。アンデルセンの作品の味を生かした、童話としての訳は、ここにきて始めてたという感がする。さし絵の橋口五葉は明治・大正にかけての洋画家、版画家として名高い。

注

- 1 『明治のアンデルセン 山室静氏の講演と翻訳目録』児童書の会 1971
- 2 注1に同じ
- 3 注1に同じ

おわりに

アンデルセンの翻訳年表は、支部上野図書館にいた頃から手がけてはいた。しかしこれは年表であって、その個々の本についての調査はされていなかった。たまたま昭和43年秋の当館職員組合の文化祭の折、館内の有志のグループである児童書の会で、当館所蔵のアンデルセンの翻訳本の展示会をすることになり、その年表をもとにして皆で手わけして訳者、画家、その本が訳された社会的背景などについてしらべてみた。またその折山室静氏をまねいて講演をしていただいた。それらは

『明治のアンデルセン 山室静氏の講演と翻訳目録』（児童書の会 1971）のパンフレットにまとめられている。今回の翻訳目録には、パンフレット作成以後にわかったこと、以前にはスペースがなくて書けなかったことなどをつけ加えた。その中には多分に私の解釈や類推がふくまれているが、目録の解題のもとになったものは、児童書の会の人達の共同の作業であることを、特におことわりしておきたい。パンフレットにのった解題には、掲載雑誌についての説明、および原文の一センテンスがはいっているが、今回はこれをはぶいた。また山室静氏の講演の内容をたびたび引用させていただいたが、これはぜひ読んでいただきたいと思う。またアンデルセンの翻訳に関してその後多くの方にいろいろ情報をいただいた。本文にお名前をあげさせていただいたが、ここにあつく御礼申し上げたい。先にものべたように、アンデルセンの翻訳、翻案はまだあるかもしれない。また訳者についてもわからないことが多々ある。お気づきの点ご教示いただければ幸である。

（いしかわ・はるえ：人文課主査）